
Newsletter

ビーリア（ボノボ）保護支援会

2026 年 4 月



ごあいさつ

ビーリア（ボノボ）保護支援会代表 古市剛史

ニュースレターでご挨拶をするのはひさしぶりになりますが、皆様いかがお過ごしでしょうか。

ご存じの方もいらっしゃると思いますが、私たちがボノボの保護活動の舞台としているコンゴ民主共和国ワンバ地区では、2023 年の 5 月に暴徒化した一部の村人に私たちの基地が襲撃されるという事件がありました。暴動の理由は、村への携帯電話のネットワークの敷設が実現しないことの責任を私たちに転嫁するいわれのないものでしたが、その根底には、教育や医療、道路整備などの分野での私たちのサポートにもかかわらず、国の経済状態の問題もあって自分たちの生活が楽にならないという不満がありました。

幸いけが人はなく、暴動も単発のもので終わりましたが、私たちとしては研究と保護の活動の全面的中断を余儀なくされました。その後さまざまなチャンネルで、ワンバ村やチュアパ州の代表者らと会談を重ねてきました。村の多くの方々は私たちが 1 日も早く現地に戻ることを希望してくださり、村をあげての安全の確保の約束とともに、2024 年 9 月から現地の調査補助員と村人による森とボノボの視察活動が試験的に開始され、このニュースレターに報告があるとおり、2025 年 8 月には松浦会員らが現地を訪れて活動の再開方針について村人らとの協議を行いました。そして今年、2026 年 1 月からは、ようやく若手の研究員ら

が調査と保護の活動を再開することができました。

現在は、村や近隣の町への道路整備等の支援、学校や病院への支援、地元中高等学校の生徒や町で学ぶ大学生への奨学金なども順次再開しています。また暴動の原因ともなった携帯電話問題も、私たちがスターリンクのアンテナを持ち込んで村人の利用に供するという形で解決を見えています。幸いなことに、私たちが観察対象としていたボノボたちには、老齢による死や思春期のメスの移出によるものと思われるもの以外、密猟等によるものと疑われるような消失はほとんどありませんでした。

一方、私たちが支援を続けてきた首都キンシャサでボノボの孤児を育てている Lola ya bonobo（ボノボの楽園）も、そこで育ったボノボたちを森に返す活動を進める Ekolo ya bonobo（ボノボの場所）が、同じく 2023 年にやはり自分たちが得られるべき利益に不満を持った村人に襲われるという事件に直面しました。しかし現在はその問題も収まり、村人たちとの協力を強化して以前にも増して活発な活動を続けていま

す。Lola ya bonobo、あるいは Ekolo ya bonobo と検索していただくとその活動の現状をご覧くださいます。

いずれの問題も、根底にはコンゴ民主共和国の貧困問題があります。またその問題は、少数の NPO などの団体が資金的・物質的支援を行うということで解決できるものではありません。私たちが目指すのは、ボノボと共存し、生息地の森を守っている住民が、そのことに見合う世界からの支援を受けられるような構造を作ることだと考えています。そのひとつの方法として現在取り組み始めているのが、ボノボの生息可能数に応じて村が国際社会からの支援を受けられる「ボノボ・クレジット」というアイデアです。

研究と保護の活動が全面的に停止していた間も、Arcus Foundation などの財団や、日本の皆様からの引き続いてのご支援があり、活動の再開に大きな力を貸していただきました。ボノボの保護の新たな局面を大きく開けることができるよう、今後ともご支援をよろしくお願いいたします。

ワンバでの研究活動の再開に向けて 松浦直毅・山口亮太



上空から調査地域をのぞむ

静寂に包まれた闇夜を切り裂くようにして、ヘッドライトを光らせた 5 台のバイクが列をなして疾走する。2025 年 8 月 12 日、ここはコンゴ民主共和国の深い森の中、時刻は 19 時をまわっていた。8 月 11 日に

首都キンシャサからセスナ機で移動し、11 日から 12 日にかけて県庁所在地ジョルでのさまざまな準備と手続きをおこない、さらに 4 時間以上かけてバイクで悪路を進む、という長い旅路を経て、いよいよワンバ村



県知事らと

が近づいてきた。今回の道のりがひときわ長く困難だったのは、移動時間のためだけではない。ワンバでのすべての研究活動が中断して以来、2年以上ぶりに研究を再開させるための旅だったからである。

ワンバは、1973年の調査開始から50年以上にわたって、ボノボをはじめとする野生動物や地域住民を対象とした研究の歴史をつむいできた。1990年代から2000年代にかけて内戦による中断があったが、2000年代以降は若手研究者も次々に参加して、研究は大きく発展してきた。しかし、2020年のコロナ禍が大きな転機となった。現地にいた研究者は撤退を余儀なくされ、その後の本格的な活動再開までには長い時間と多大な労力を要した。

そうしたなかで、長年にわたって築かれてきたワンバ村の住民と研究チームの協力関係にもひずみが生じていった。政治経済状況の時代的变化から、研究チームに対する住民の要求はエスカレートし、ついには「村に携帯電話の電波塔を建設せよ、できれば研究活動は認めない」という強硬な主張までなされるようになった。一部の住民が攻撃的な態度さえ示すように

なったことで、いよいよ研究活動が続けられなくなって中断に至ったのが2023年のことだった。

その後、現地研究機関のスタッフと連携して遠隔でやりとりしながら、なんとか研究の灯を絶やさないように努力を続けてきた。住民たちも、研究活動がもたらす雇用や研究チームによる地域支援の重要性を再認識して、研究活動の再開を望むようになっていた。

こうして2025年8月、中断していた研究活動を再開させるべく、いよいよ研究者が現地に赴くことになった。はじめはボノボ研究者ではなく人類学者が行った方が良さだろうということで、われわれに白羽の矢が立った。過去に実施したプロジェクトでの協働を通じて、われわれも住民と良好な関係を築いてきた自負はある。しかし、要求がエスカレートして以降の強硬な態度や攻撃的な姿勢も知っただけに、われわれが行ったらどのような反応があるのかおおいに不安だった。かれらはどんな要求をしてくるだろうか、寄ってたかって責められたらどうしよう、それどころか村につくやいなや縛り上げられて拘束されるかもしれない。村が近づくにつれて胸が高鳴ったのは、久しぶりのワンバへの期待というのではなく、何が起こるかわからない不安が大きかったからである。

19時15分、いよいよワンバ村に入る。村のまんなかを貫く道を突っ走っていると、ところどころにアブラヤシの葉のアーチがしつらえられているのに気づく。一瞬、何かの儀礼があったのかと思ったが、そうではない。これは、われわれを歓迎するしるしだ。われわれの到着に気づいた人々（気づいたというよりも、われわれが到着すると聞いて昼間からいまかいまかと待っていた人々）が、バイクの音を聞いて大歓声をあげる。真っ暗で人の顔はほとんど見えないし、旅の疲れもピークに達していたが、バイクの上から道の両側



ワンバまでの道中は困難



基地についたばかりの様子

に向けて、精いっぱい手を振ってあいさつを返す。

村を縦断する「凱旋」の末に、村の南端近くのワンバ基地にたどり着く。大勢の人ばかりが大歓迎のようすで迎えてくれる。見知った顔がつぎつぎと出てきて握手を交わす。不安は感動と興奮に変わり、胸にせるものがある。2年以上の空白があったが、基地はきれいに掃除されており、すぐに使えるいつものどおりの状態に整えられていた。身体を休めていると、ほどなくして食事が出てくる。キャッサバの団子(クワンガ)と鶏肉の煮込み、これもいつもの味だ。ようやく人心地がついて、安心感に包まれた。

さてしかし、これにて任務完了というわけではない。抱えてきた不安は、大歓迎で迎えられてもまだ消えてはいない。研究活動再開に向けた重要な会議が待っているからである。到着翌日の8月13日午後、さっそく村長の家の前に集まって話し合いがおこなわれた。この会議も、どんな批難や糾弾が出てくるのかという不安をよそに、きわめて平和的に終始した。研究活動の再開を待ち望んでいたのは、かれらも同じだったのである(それならはじめて無理難題をつきつけて追い出すなよ!とはいわないでおこう)。歴史ある調査地の存続をかけて研究活動再開の手はずを整えるという、われわれに課された重大なミッションは、かくしてほとんど何の苦労も困難もなく達成されたのだった。

2026年、ワンバでの研究活動は本格的に再開される。ちょうどいま(1月19日)、研究者のひとりがワンバに着いたという衛星通信の連絡があった。私(松浦)も、調査の基盤を作り直し、地域支援の再開を進めるために、2月にふたたび現地に向かう予定である。50年続いてきたワンバの歴史は、次の50年に向けてつながり、歩みはじめたところである。今後の研究の



村での会議のようす



ワンバからの道中も困難

発展にご期待いただきたい。

※研究活動の中断から再開にいたるまでの顛末とその後の最新情報については、NPO 法人ビーリア保護支援会と NPO 法人アフリック・アフリカの共同企画として、それぞれのウェブサイトで4月より連載エッセイでご紹介する予定です。それぞれの研究者がそれぞれに汗と涙を流しながら取り組んできた波乱万丈の活動記録をぜひご覧ください。

アフリック・アフリカウェブサイト

<https://afric-africa.org/>



※ワンバへのバイクの旅の動画を以下にまとめています。なかなかたいへんな旅の一端を体験してみてください。

バイクの旅

<https://youtu.be/trQoZo0otJ0>



ワンバの森で出会うボノボと人

徳山奈帆子



樹上でボノボを見上げる子どもたち

ボノボが暮らすワンバの森は、ワンバ村の人々の暮らしも支えている。彼らの主食であるキャッサバは二次林を切り開いた焼き畑で作られ、おかずは森での狩猟採集や、湿原や川での漁業によって得られる。私たち日本人が、ハイキングに行くときたまたまニホンザルやシカを見かけるように、ワンバの村人は森にでかけるときたまたまボノボと出会っている。

ボノボの観察をしている中で、そのような村人とボノボの出会いの場に居合わせることがある。ボノボを見たときの村人の反応はさまざまで、なかなかに興味深い。例えば、魚釣りに来た子どもたちは、ボノボの声を聴いて近づいてきて、楽しそうに話しながらボノボを観察していた。ボノボが大きな声で鳴くとビッククとして、でもその自分たちの様子が面白かったのか声を上げて笑っていた。畑仕事に行く途中でであろう女性たちは、「ワッ！」と一度逃げていったあと、引き返してきて少し離れた場所から怖々と、でも関心はある様子でボノボを見つめていた。

村人のうちどれくらいがボノボと出会った経験をも

ち、その出会いをどのように感じているのかを知りたくなり、2022年にアンケート調査を行った。ワンバ村にある3つのセカンダリースクール（日本でいう中高一貫校）の生徒約300人に協力してもらい、これまでにボノボと出会った回数や、その時に感じた気持ち、ボノボの保全への意識に関する質問に答えてもらった。アンケートの結果、80%以上の生徒がボノボと出会ったことがあり、半数以上が10回以上のボノボとの遭遇経験があることが分かった。そのうち75%の生徒が、ボノボを見たときに「うれしかった」と回答した一方で、20%の生徒がボノボを見たときに「怖かった」と回答した。ボノボとの遭遇をポジティブにとらえる生徒が多数派であるものの、恐れを感じる生徒もいるということだ。「あなたはボノボを守りますか？」という質問に肯定した生徒は90%近くにのぼり、たとえばボノボを怖いと思ったとしても、ボノボを大切に思う気持ちをもつ生徒がほとんどであることもわかった。

今回の調査からは、ワンバの人々とボノボが全体

的に密接で良好な関係性を持っていることを改めて確認することができた。世界各地で野生動物による農業・人的被害から感情的な対立が深まる中、ワンバにおける村人とボノボの関係性は奇跡のようなものだと思う。村人がボノボを守りたいという気持ちをこれからも持ち続けることができるように、私たちボノボ保護支援会は、ボノボに関するレクチャー、畑荒らしを防ぐ予防的措置、医療・教育といった村へのサポートなどを引き続き行っていきたい。



アンケートを行った教室の様子

ホームページをみてください

ボノボ（ビーリア）保護支援会のホームページでは、新着情報もチェックできます。ぜひ、ご覧ください。
<https://www.bonobo-wamba.com/>



また、ワンバで研究活動を行っている研究者のグループ（Wamba Committee for Bonobo Research）は、SNS(facebook, instagram, Twitter) でボノボや村の生活のことなど、随時情報を発信しています。あわせてご覧ください。

Facebook
Bonobo Research at Wamba
@bonobo.at.wamba

X:
ボノボ・人類学研究チーム @ ワンバ
@wambabonobos

Instagram
Wambabonobos



ご寄付のお願い

私たちの活動にご協力いただける方に寄付をお願いしています。寄付金は、野生のボノボの保護やボノボ孤児施設の支援に使われます。使い道にご希望があれば、「野生のボノボの保護」「孤児施設の支援」など、振替用紙の通信欄にお書き添えになるか、メール等でご連絡ください。また、上記ホームページでは、クレジットカードによるご寄付を受け付けています。どうぞ温かいご支援をお願いいたします。

加入者名： ビーリア（ボノボ）保護支援会 銀行名： ゆうちょ銀行
店名： 〇八九 預金種目： 当座 口座番号： 0128368
郵便振替： 00820-7-128368

ビーリア（ボノボ）保護支援会

〒484-8506 愛知県犬山市官林 京都大学犬山キャンパス
Email: bonobos.scb@gmail.com 電話: 0568 63 0537
Home Page: <https://www.bonobo-wamba.com/>